

Popoki



ポーポキ通信 No.36 – 2008.8.29

popokipeace@yahoo.co.jp / popoki.cruisejapan.com

8月4日から11日まで、ポーポキ・ピース・プロジェクトの仲間とパレスチナに行ってきました。今回のポーポキ通信は、その報告を中心にします。

ポーポキ in パレスチナ

「ほとんど文章編」

＊ ＊ メンバー

岩永淳志、浦井加奈、桂木さとこ、堀越健志、森恭子、ロニー・アレキサンダー

＊ ＊ 目的

- ・パレスチナの現実を見て、感じる
- ・パレスチナの人々にポーポキを紹介し、一緒に平和について語り合う



* スケジュール

8. 4 ベツレヘム、ヘブロン(NGO訪問など)。ホームスティ。

8. 5 分離壁を見てからエルサレム観光。YWCAでナクバ60周年記念写真展を見た後、アラブ系・ユダヤ系の子どもたちの教育を行っているオープンハウス創設者ダリアさんの家へ。ホームスティ。

8. 6 ジェニン(難民キャンプ)、セバステア(ローマ帝国時代の遺跡)、ナブルス(トルコ風呂)など！？！(サボテンの実の試食と格闘。美味しいぶどうをご馳走！)

8. 7 ナブルスのアンナジャ大学訪問、殉教者のお墓参り、市内探索、ベツレヘム大学のマリアム・アワード先生と懇談。(ガイドさんの指導のもとでスイカをゲット！)

8. 8 青少年団体でポーポキ・ワークショップ。ビリン村で毎週金曜日に行われている分離壁反対デモに参加。晩はマリアムさんのお宅にご招待！食べ過ぎました。ご馳走様でした！！

8. 9 主に子どもを対象とするコミュニティ・メンタル・ヘルス・クリニックでワークショップ。マリアムさんのお宅からイチジク、ザクロが届く。午後はマサダ、死海、エリコなど。バナナもゲット！

8. 10 二人きりになったAtsushiとTakeshiは、ホロコースト博物館を見てから、近所の子どもたちと大好きなサッカー！

* パレスチナへのアクセスは、イスラエルのベングリオン国際空港に到着

してからタクシーでベツレヘムのホテルへ。帰りもその逆コース。パレスチナの資料などを持っていると、空港で取り上げられる場合があるので、現地から郵送しました。メモリーカードも入っていたので、それが届くであろう来月には、ポーポキ in パレスチナ「写真編」をポーポキ通信に載せる予定です。



地図 <http://www.eastedge.com/palestine/map.html>

① パレスチナ旅行へ行って

浦井加奈

「アレキサンダー先生がイスラエルに行くみたい。一緒に行けるらしいけど、行ってみる？」という友人の誘いを受け、参加者中最も“軽い”気持ちで今回の旅行に参加を決めたのが私だったのではないかと、思います。

イスラエルがパレスチナと土地をめぐる紛争状態にある、ということくらいしかわかっていなかった私は、「このままではいけないな」と、何冊かの本とインターネットの記事を引っ張り出し、一夜漬けの知識でもないよりはまし、と多少の現状の勉強をしていました。（それはまったく十分ではありませんでしたが・・・）本を読むと、どうも多くの難民が今も家の鍵をもって何十年と帰ることを待っているらしい、パレスチナ側にいる人たちはことあるごとにイスラエル側に封鎖され、何日も何週間も身動きの取れないことが起こるらしい、というようなことがおぼろげながらにわかってきました。

行ってみるとこれらのパレスチナ人への制約は、旅のあらゆる場面で目の当たりのすることでありました。私たちを案内してくれたパレスチナ人のガイドさんは、エルサレムへ行く日には私たちに同行することが出来ませんでした。多くのパレスチナ人は特別な許可がない限り聖地エルサレムに入ることが出来ないのです。分離壁の周辺は人の往来がなくなり、多くの店が商売を続けることが出来なくなっていました。また、チェックポイントといって要所に設けられたイスラエル兵による検問所を通ることができず、無駄な大回りをしなければならない日もありました。「自分たちがどれだけの侮辱をうけているのかわかるか？」「ここは大きな刑務所なのよ、どこにも自由にいくことはできないわ。」そんな言葉を何度もきいたように思います。

それでもなお、私がパレスチナで感じたことは人間のたくましさや希望でした。イスラエルの無茶苦茶な占領状態のせいで街を出て行ってしまった人々を帰すように地道な努力を続ける団体がありました。継続して毎週非暴力のデモを続ける村がありました。ガイドさんは旅行者になんとか自分たちの歴史と現状を知って欲しい、と大変な熱意をもって私たちを案内してくれました。もちろんどの人もイスラエルへの怒りと現状への落胆をもってはいます。でも、どの人にも誰かを傷つけてそれを変えてやるのだ、という悪意に満ちた気持ちはありませんでした。これまでの紛争と占領による被害状況を伝えようとする惜しみない努力と、それを変えようとする人々の積極的な活動からは、個人的

にも大変に勇気付けられるものがありました。

ただ、今回私が感じた希望と反するように、パレスチナを囲む分離壁や西岸地区の中の入植地は現在進行中で建設されています。人々の希望はいつ絶望に変わり、そして暴発してしまうかわからない状態であることもまたよくわかりました。

最後になりましたが、今回の旅のメンバーの皆さん、本当にありがとうございました。皆さんのおかげで素晴らしい旅になり、また無事に帰国することもできました。この場をおかりして感謝申し上げます。



② パレスチナ／イスラエルの旅

岩永淳志

今回の渡航では、多くの経験ができました。様々な団体のお話を聞き、直接被害にあった人たちの話を聞き、毎週金曜に行われているイスラエルの入植・占領に対するデモに後方から参加したり、分離壁に足跡を残したり、いくつかの遺跡を訪れたり、絶景を見たり、死海にプカプカ浮いたり、子どもとサッカーして遊んだりしました。これらの経験の中でも、イスラエルとパレスチナの領地を分断する壁を実際に目の前で見た時は、言葉になりませんでした。僕は、その存在感に圧倒されてしまいました。また、とても多くのチェックポイントがあり、そこには銃を持って警備する兵士が多くいました。日本とは全然違う光景が広がっていました。



僕は、大学院に入学してから特に平和と教育に興味を持ち始めました。そのため、今回の渡航もそのことを念頭においていました。平和的共存社会が望ましいと言うことは簡単だし、それが大切だというのは分かっています。しかし、直接イスラエルから被害を受けている

人たちの話を聞いた後、その人たちに平和的共存社会が望ましいとは言えない気がしました。それは、被害者に言うのは見当違いで加害者に訴えるのが正しいと感じたからです。しかし、難しいのはイスラエル人もかつては迫害を受けてきた被害者だからです。被害者と加害者の判別が付かず、どちらが一方的に悪いというのが分からなくなっています。ただ 1 つ分かるのは、やっぱり一方的に侵攻する今の状況はおかしいということです。この事に関してイスラエル人の方々はどう考えているのか。イスラエル人の方々の話も聞きたくなりました。また、こういった問題の解決に関して第3者は何かできることはあるのか？そもそも何もしない方がいいのか？など、色々な疑問が浮かんできました。でも、時間は待ってはくれませんので、走りながら考えるしかないな～と思っています。

An-Najah 大学を案内してくれた学生たちと一緒にサッカーをした子どもたちは、とても元気で笑顔が素敵でした。彼らのお手伝いができたら良いなと思ったパレスチナ／イスラエルの旅でした。

写真：パレスチナの町並み



③ パレスチナでポーポキ・ピース・ワークショップに参加して

さとこ

私は、今まで何回かポーポキのワークショップに参加したことがある。



そして、いとも簡単に「平和って何色？」「あなたの平和は 他の人の平和と関係がありますか？」

と言う質問を何度となく口にし



たような気がする。

しかし、今回イスラエル・パレスチナに行って、この問いかけが、如何に難しいものであるかを思い知らされた。

本当に“平和”とは何なのだろう？





ベツレヘムの子どものサポートセンターで、精神科の医師は、PTSDとは心的・身体的外傷後一ヶ月後に発症する症状であるが、子どもたちは毎日大きなストレスを抱えた生活を続けているため、今の状態をPTSDとは言い難いという。



しかし、同じセンターのソーシャルワーカーの方は、言葉を失って、自分自身を表現できずに苦しんでいる子ども達に、ポーポキはとても良いと言って下さった。



ピース・プロジェクト・メンバーと折り紙をして、ワークをするセンターの職員の方はやはり日本でのワークショップ参加者と同じように、どんどん表情が明るくなる。





小さいかも知れないけれど、確かな手応え

はあったように
感じられた瞬間
である。



今回の旅の中

本当に優しく、お世話になりっぱなし。私たちを歓迎してくれた、ホストファミリーや招い

で知り合った、パレスチナの人々は

て下さった方々。トラベルエー
ジェントの方。

特筆すべきは、お礼の寸志を
ピース・プロジェクトの活動に
使って欲しいと言われた最高
のガイドさん。参加する結婚
ナを、見て欲しいと私たちを



式に遅れても、愛するパレスチ

色々なところに連れて行って下さった、ナンバーワン・ドライバーさん。



本当にありがとうございました。



そして、一緒に行って
ダー先生を始めポー
クト・メンバーの皆さん



下さった、アレキサン
ポキ・ピース・プロジェ
本当にありがとう！！

④

「平和」の要素

森 恭子

短い滞在だったけれども、久しぶりに時間というものが、こんなにじっくり、ゆっくり流れているものなんだということを感じた。それくらい、毎日朝から夜中までしっかり動いて、見て、におって、感じた。

この旅で印象に残っていること。

それは、たくさんショックを受けるような現実を目にしたけれど、その現実の中においても、多くのであった人達が、勇気と希望を持ち続けそれに向かって自分のできることを一生懸命に行なっている姿だ。私は、彼らの姿から自分と関係ない問題ではないとは言えない、無関心ではいられない、とそう強く感じた。そして、ある人との出逢いによって「想い」の大切さを強く感じる旅となりました。

エルサレム在住で、Open House というアラブ人とユダヤ人のこどもたちが一緒に学ぶ機会を提供しているダリアさんという女性に会った。彼女の家と呼ばれ、彼女が私たちに語りかけてくれた言葉。彼女は、「想いは空を飛ぶ」と言った。イスラエルから遠い日本。現実を知っても「私には何ができる？」という自分自身への問い。彼女は、現実を見たけれども、私に何ができるのだろうか、という私の不安で無力感に襲われる気持ちにその言葉をくれた。とても、とても、とても感動した。

だから、私は日本に帰ってからも、ずっとイスラエルとパレスチナが平和になれる日がくることを祈り続けていると伝えたら、暖かくやさしい目でとても嬉しそうにしてくれた。祈りだけでいい、とは思わないけど、それだけでも力になることを私に教えてくれました。

旅の途中に見た数々の衝撃的な現実。巨大な分離壁、その周りの変化してしまった人々の生活、イスラエル軍によるユダヤ人とパレスチナ人との行き交いを規制している多くのチェックポイント、非暴力による毎週金曜日のデモ、街に張られた殉死したパレスチナ兵と子供のポスター、エルサレムの町を巡回する銃をもった少年たち、入植者の家、破壊されたパレスチナ人の家と街。数々の場面には、「暴力」という考えが背後にしっかり根付いていた。

なぜ、そんなにも争いが続いてしまうのか。なぜ、人が人を監視したり隔離しているのか。どこにそのような権限があるのか。私より若い学生達は、自分の街の大学ではない限り、皆が通学のために毎日チェックポイントを通り、大変な思いをして通っている。小

学生も同じだ。未来の担い手であるこどもたち、若者たちの自由が脅かされている状況。

自分は、勉強だ！と思って日本からパレスチナにやってきた。思えば、自分が決断し、行動すれば叶うことが、ここではそんな純粋な想いや当然の権利さえも疑いの的、監視の的になってしまうのだ。生まれて初めて、権利が脅かされているという実感と状況を経験した。パレスチナで出会った人がよく、「大きな刑務所」だと自治区のことを表現していた。確かに、一見すると生活の不自由さはあまりわからない。しかし、自分の家や街から一歩外に出ようものなら、それには大きな苦勞とストレスが伴うということを知った。

毎日、こどもを学校に行かすことさえも家族は心配に満ちているだろう。ひとたび家族の帰りが遅ければその心配の想いは計り知れない。

平和の要素には何があるだろうか？私は「想像性」が大事だと思っている。旅行中、ガイドさんやドライバーさんは「イマジン！」と説明のときによく言っていた。私たちにたいて、同じ境遇ではないけど自分達の毎日の生活や置かれている状況を想像してみて、と言っているのだと私は受け取った。

現地に行く機会を得て、現地の人々に会い、時間をともにすることで、少しパレスチナの状況を知ることができたと思う。そして、ダリアさんは想いは空を飛ぶと教えてくれた。出逢った人たちの日々を想像し、パレスチナとイスラエルの平和となる日を想像し、想い祈り続ける。あらためて、平和の要素には「想像性」が大事なんだ、と思いました。



⑤ イスラエル、パレスチナへ行った感想

堀越健志

イスラエルに行こうと思った理由は、先生から初めてその話を聞いた時、「おもしろそう！」と思ったことが一番大きな理由です。それから、まだ紛争が続いている地域は、実際どんな状況なのかということを目で見たかったということもあります。

私は、約2週間滞在し、最初の1週間はハイファでIPE2008に参加し、後半の1週間

はヨルダン川西岸を回りました。イスラエルの都市とパレスチナの両方を見て感じたことがあります。それは、イスラエルの都市とパレスチナの町の様子の違いです。ハイファでは、道路がきちんと舗装されていたり、町全体がしっかりと整備されていて、とても近代的な印象を受けました。一方でパレスチナでは、舗装されていてもデコボコであったり、ゴミがいたるところに散乱していたりと整備の不十分さが目立ちました。これが占領する側とされる側の違いなのだなと感じました。

そして、私がこの旅行で一番身をもって実感できたことは、パレスチナが占領されていること、パレスチナの人々が抑圧された状態にあるということです。私たちは、移動の際にチェックポイントをいくつも通り、時には遠回りしたことがありました。このような生活を毎日送る当事者はかなりのストレスが溜まるに違いありません。また、分離壁を間近で見て触れた時には、その重さと冷たさ圧倒的な圧迫感を感じました。同時になんとも言えない感情が溢れてきて私は少し泣いてしまいました。しかし、このような状況におかれていても、パレスチナの人々は一生懸命生きているのだということもわかりました。もっと暗いイメージをもっていた私には、それが驚きでもあり、喜びでもありました。そして、占領さえなければ、という思いが込み上げてきました。

最後に、この写真は、パレスチナ滞在最終日に、たまたま一緒にサッカーをした子どもたちと撮ったものです。私は、彼らと一緒にサッカーをしている時、彼らが嬉しそうにサッカーをしている姿を見たとき、平和？を感じたような気がしました。いつか、パレスチナ人とユダヤ人が同じグラウンドで一緒にサッカーをする日が来ればいいのにと、強く思いました。



パレスチナ滞在最終日、
ホテルの近くの駐車場で

⑥ 自由ってなに色？パレスチナで考えたこと

ロニー・アレキサンダー

自由って、なに色？最初に見たとき、パレスチナの雲の一つない高い青空は自由の色だと思った。どこまでも飛んでいけるような、夢を膨らませてくれるような、息をいくら吸っても肺がいっぱいにならないような青空。思わず笑ったり抱き合ったり歓声をあげたりしたくなるような青空。一人ひとりがあるがままで良いような自由な青空…。

一週間という短い旅だったが、まず発見したことは、パレスチナの青空の下にある現実には自由じゃない。厳しい占領の中で人々の移動の自由のみならず生きる権利までも奪い取られ続けている。なぜ？なぜそんなことをするの？

パレスチナの現状を最初に実感したのは、始めて分離壁に触ったときだ。見上げると相変わらずの青空だが、そこに至るまでには 9 メートルのコンクリートと 1 メートルの鉄条網。デカイ！硬い。そして動かない。イスラエルは安全を求めているというが、人々の家を壊し、生活を壊し、やがて心までも壊してなにが安全か。こみ上げてくる怒り、悲しみ、無力感を表現するにはポーポキが助けてくれた。「No wall!」「No more occupation!」。ポーポキの訴えの傍にみんなの名前が並んでいる。私たちは日本に帰ってきたが、今日もポーポキは壁から訴え続けている。



パレスチナに行く直前にイスラエルで開催された国際会議に出席し、ユダヤ人やパレスチナ人の友人との議論を通していわゆるパレスチナ問題に対する理解がいくらか深まり、その複雑さを痛感した。西岸地域から出席したパレスチナ人はイスラエルに入る許可が取れなかったりした。イスラエルの友人は、イスラエル法によって西岸地域に行くことが禁止されているという。「安全」という名において、イスラエル政府

は市民の交流も制限しようとしている。毎週金曜日、分離壁に反対するデモを行っている村がある。それに参加したとき、イスラエルから毎週参加してくる二人のユダヤ人に出会い、少し救われた気持ちになった。もちろん、ポーポキの本を彼らにも分けた。

一般的に「平和」ということばはあまり使われないのが印象的だったが、話の内容から判断してみんなが平和に暮らすことを望んでいるように思った。だが、至るところにあり生活をじゃましている壁やチェックポイント、驚くほどの数の入植住宅とそれらに通じる専用道路に出会う度に、自分の中の動揺が激しくなってくるのを感じた。占領下にいるとき、平和ってどういう意味？大学院時代に度々教授に聞かれたことを思い出す。「平和より大事なものはあるの？」、と。パレスチナという国には平和の色はあるのか。答えは未だに出ない。

自信をもって言えることは一つだけだ。どういう形になるかはわからないが、占領はいずれ終わるだろう。そのとき、「平和な国」を創ることができるパレスチナ人が一人でも多くいれば良い。そのための準備は既に始められているが、現状は厳しい。最後の日に聞いた話では、大多数の子どもたちはPTSDの症状を見せている、と。パレスチナ人はねこをあまり好きじゃないようだが、その子どもたち一人ひとりにポーポキの大きなhugを届けたい。

帰る頃に青少年活動を行っている団体でワークショップの機会を与えられた。現実を見てから自信を落としていたが、ポーポキの力を信じることにした。ワークショップでは今までにないことがあった。「あなたの平和は他人の平和と関係がありますか？他の人



が平和でないとき、あなたは平和になれるですか？」と問いかけるポーポキ。それに対して、パレスチナ人の二人の答えが対照的だった。必ずイエスと必ずノー、と。そして、グループとしてか、個人としてか、という質問もあった。なるほど。わかるような気がした。だが、彼らの話をもっと聞きたかった。

パレスチナ行きの主な目的は二つだった。一つは、「紛争」を支える文化や歴史、風景、感情などに対する理解を深めることで、もう一つは、ポーポキを媒介に「平和」について語り合い、ポーポキの力(ひょっとして自分の力も？)を試すことだった。第一の目的については、すばらしい景色、美味しい食べ物、想像を超える歴史に加えて、なによ

りも感動したことは人の心だった。暖かく受け入れてくれて、一生懸命に語ってくれた人々。辛い体験を思い出しながらも必死で訴える人々。楽しそうに笑ったりする人々。散歩中に「迷っていないか」と声をかけてくれる人々。友達になってくれた人々。占領下にいても、人を歓迎することができるのだ。歓迎された者として心から感謝したい。

第二の目的も達成できたと思う。ポーポキに対する理解はまちまちだったが、平和について語り合う機会を得ることができた。そして、パレスチナで与えられた課題はきっと、ポーポキの新たな発展へと導いてくれるだろう。正直に対応してくれたみなさん、心からありがとう。

パレスチナってなに色？涙色、怒り色、抵抗色だけではない。自由、正義、愛、いのちの色も混ざっている。「パレスチナは怖い、暴力とテロリストの国だ！」と言われるが、行ってみてわかったことは、それが大きく間違っていることだ。パレスチナは占領下であり、数々の問題を抱えていることは事実だ。でも、パレスチナは豊かで人を愛し、家族を愛し、平和を愛する国だ。

パレスチナが一日も早く真の「平和の色」になってほしい。その日が少しでも早く来るよ、私はかかわり続けたいものだ。

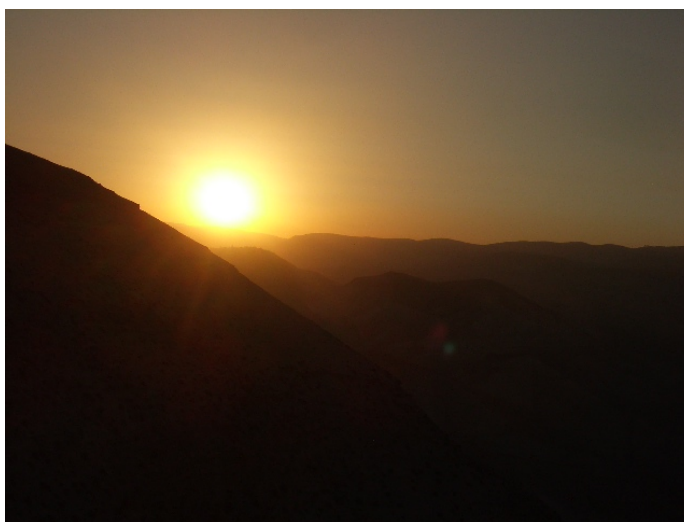


写真1:エルサレムに入る手前の分離壁

写真2:ビリン村で毎週行われる分離壁に対する非暴力抵抗

写真3: 青少年団体でのワークショップ

写真4: 砂漠の岡の後ろに沈んでいく太陽

NEW!!!



ポーポキちゃんの簡単ポガ教室

Lesson 3

ここまで読んで、お疲れでしょう。ポガでリラックスしましょう！

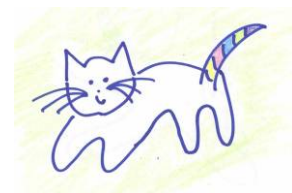
1. 背筋を伸ばし、自分を細く見せながらちゃんと座りましょう。
2. 両手を横へ。尻尾は反対方向ですね。表情は絵のように・・・。
3. 今度は手を反対方向へ。尻尾も。表情は？
4. 両手も尻尾も上へあげて、うれしい！！
- (5. デキタ・ポーズ)

第3回目のポガ・レッスンはこれで終わります。



おつかれさまです！毎日、最低 3 分間を練習しましょう。

一緒にいかが？



ポーポキが登場するイベントなど

- ・ 9.6 ポーポキ at 熊本 YMCA
- ・ 9.13 ポーポキ at 子ども博物館&ピッツバーグ大学 Pittsburgh, USA
- ・ 9.30 ポー会 19:00ー 神戸 YMCA
- ・ 10.6-10 第 6 回国際平和博物館会議 Information: 6peace-m@st.ritsumei.ac.jp
- ・ 10.16-18 ポーポキ at “Learning Democracy by Doing: Alternative Practices in Citizenship Learning and Participatory Democracy” 国際会議、Toronto
- ・ 11.16 「部落解放研究第 29 回兵庫県集会」 場所:ラッセホール 時間:10時～16時
記念講演:10時40分～12時(ロニー・アレキサンダー) 12時～13時 昼食
13時～16時 分科会／学習会落解放研究兵庫県集会」 世界人権宣言60年のポスター展！



ポーポキinメディア



- ・「社説 終戦の日」神戸新聞 2008. 8. 15
- ・中国新聞「核廃絶への視点」2008. 7. 27（核抑止論について…。3時間！？にわたる取材で一生懸命にポーポキのことを話したのに…。）
- ・（社）ひょうご部落解放・人権研究所発行の機関誌『ひょうご部落解放』（2008. 6 月（夏）に「人権宣言 60 周年」のポーポキ・ポスターの一部も載っていますよ！

私にとってのポーポキ



ポーポキはなに色？

新倉修

（青山学院大学＋9条世界会議日本実行委員会共同代表）



思った。古くは(古すぎるかも?)、バーネット著『小公子』では主人公が入れ替わるとい

ポーポキは、ハワイ語で「ネコ」を意味する一般名詞だが、自分の飼っているネコに「ポーポキ」と名づけると、それはもう一般名詞の固有名詞化じゃないのか？などと戸惑いながらも、名詞の機能転換は、立場や視点の入れ替えという遊技に似ていると

う趣向が重要なモチーフとなった。ドイツでは、社会学者がトルコ人になりすまして、ドイツ社会に根をはる移民労働者に対する冷たい視線や差別視を体験した例もある。一般名詞を固有名詞として使うと、その一般名詞を含む言語が、まったく別の言語の体系の中で、固有な存在感を獲得するというインパクトもありそうだ。このような立ち位置の転換や変換が、平和をつくる運動で不可欠の役割を果たしていることは、容易に想像できる。



のセピア色になってしまったりするのかも知れない。

そういえば、国内人権委員会をつくらうという国連パリ会議の決議に後押しされても、いざ国内人権委員会のようなものをつくる段になると、国籍にこだわってしまい、立ち往生をしてしまったり、あるいは国立の学術組織についてさえ、国籍にこだわり国境を越えた学術の空間をつくるのを拒否したりするようなこの国に住むことは、悲しいことだ。こんな時には、ポーポキが悲しみルリ色になったり、思い出



写真:

- ① 青年集会
- ② 広島での行進
- ③ 9条世界会議に招かれたロビン・アレキサンダー弁護士
- ④ 9条世界会議の国際パネル

さらにご協力ください！



ポーポキ・ピース・プロジェクトにご参加のみなさま(ポーポキ平和基金に一口以上を振り込んでいただいたみなさま)には、本がすでにお手元にとどいていると思います。

これからはピース・ワークショップ、ピースキャンプ、翻訳、『ポーポキのピース・ブック 1』などの活動を中心に行なう予定です。ご協力、ご支援のほど、よろしくお願いいたします。『ポーポキ、平和ってなに色？』についてのコメント、感想、追加注文などについては、popokipeace@yahoo.co.jpにお問い合わせください。

本についての問い合わせや注文はお近くの書店あるいはエピック
(TEL: 078-241-7561・FAX: 078-241-1918)へ。

ポーポキ・ピース・プロジェクト popokipeace@yahoo.co.jp



<http://popoki.cruisejapan.com>

郵便振替口座番号 00920-4-280350

口座名称 ポーポキ・ピース・プロジェクト神戸

ポーポキ平和募金は一口 1500 円 何口でも結構です。



THANK YOU FROM POPOKI!